慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	朝鮮民族統譜(尹昌鉉著, 漢城圖書株式會社發賣)
Sub Title	
Author	高橋, 琢二(Takahashi, Takuji)
Publisher	三田史学会
Publication year	1925
Jtitle	史学 Vol.4, No.2 (1925. 5) ,p.147(307)- 147(307)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19250500-0148

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

の石ともなり、村の觀察者にとつての好手引書であり、一般讀書界にとつての生きた地理書である。さうして各編中に地圖を挿入されたことも、編者の用心がしのばれてうれしい。

一體人間の生活はいつの時代、いづこにおいても土に即したものであつて、この土の上に大小の集團をなしてゐるのである。さうしてその土地の狀態如何によつてその集團の形式や發達が非常に異るのみならず、その集團の人々の性格や生活樣式までその影響をうける　海岸の村、川ぞひの村、山間の村、平原の村は、それぞれその聚落の方法が異り、その發達に特色がある。人間の生活を知るためには、あはせてその土地の研究を怠つてはならない。人間と土地との不斷の鬪爭が人間生活の大きな部分をなしてをり、しかもそれが鄕土の研究によつて最もよく具體的に示さるゝのである。鄕土研究の意味と興味はこゝにある。本書を生んだ鄕土會のごとき、本書をもつて唯一の紀念品として滅びてしまつたのはまことに惜しく、日本の社會に是非存續してほしかつたものゝ一つである。

（松本芳夫）

朝鮮民族統譜（尹昌鉉著　漢城圖書株式會社發賣）

本書は朝鮮の氏族志とでも見るべき書である。先づ朝鮮の諸氏族をその姓に隨つて――金とか李とか云ふ風に――分類し、各姓に就いてその朝鮮に何本あるかを示し、又姓源を總論してある。姓源は多くの場合支那にあるので此の總論は支那の文獻の上の調査になつてゐる。次にその姓に屬する諸氏を本貫を異にするものごとに列擧して、始祖と後孫中の名人とを示したものである。附錄に『中國姓氏考』がある。兩班世家が勢を振つた半島の歷史を研究するには、參考書の一たるを失はぬ。此の書の凡例を見るに、著者は、すべて文字があつて然る後姓氏がある、朝鮮には素文字がなかつたが、之を支那から輸入するに及んで、又姓氏を輸入したと云ふ意味のことを述べてゐる。之によると、史上數多の漢人が東來居住したと云ふことはあるが、兎に角諸氏の姓源と血統上の源とは必ずしも一致せぬことになる。著者は特に此の點を明にして『如相國李奎報國子史業尹公哀辭曰、天水尹公諱威字某、蓋相國聞見、不知尹公之本、自坡平分籍南原、而曰天水尹公耶、此尹氏本少昊之裔、系出天水故、相國必於姓源貴之也、覽之君子、諒、應勿此姓氏族皆出於中國也』と云つてゐる。姓源と血統とが別個のものであり得るとすることには、余輩も誠に同感である。なほ著者が、贈人の文字の氏名の上には、その人の貫鄕を記する場合と姓源を記する場合とあるとしてゐるのは、留意すべきことである。

（十四、四、五　高橋琢二）

藤田博士の「薩寶について」を讀む

はつきりは覺えてゐないが、自分が最初に佛典の中に「薩薄」といふ難解な文字を見出したのはかなりに以前のことである。それ以來、決して自分の腦裡からこの文字が逸出してしまつたわけではないけれども、語學の力の貧しさと不勉强のために最近にいたるまで疑問標のついた語彙の中に埋めてしまつてゐたのであ